

さけの遡上(かえ)る川-4 遊楽部川 (北海道)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産研究・教育機構 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂上, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009578

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



さけます情報

か え ゆうらっぶ
さけの遡る川-4 遊楽部川(北海道)さかがみ てつや
坂上 哲也 (水産資源研究所さけます部門 資源増殖部八雲さけます事業所)

遊楽部川は北海道渡島半島中央部の八雲町に位置し、遊楽部岳 (1,275m)、太櫓岳 (1,053m) に源を發し噴火湾に注ぐ二級河川です (図 1)。幹流の長さは 28.5 km ですが、全流域面積は 351.8 km² にもおよび、2 カ所のふ化場から毎年約 1,670 万尾ものサケ稚魚が放流されています。また、毎年秋にはサケの自然産卵が見られ、冬には天然記念物のオオワシ、オジロワシが数多く飛来することでも知られています。遊楽部という名はアイヌ語のユー・ラブ (温泉が下る) に由来すると言われていています (図 2)。遊楽部川は開拓以前からサケが多く獲れる川として知られていましたが、今回は明治以降に発展してきた歴史について紹介します。



図 1. 遊楽部川の位置図

図 2. 遊楽部川と河川標識 (八雲大橋にて撮影)
遠くに川の源である遊楽部岳や太櫓岳などの山々を望む。

さけます増殖の始まり

遊楽部川におけるさけます増殖の歴史は、明治 13 年に北海道で初めて「種川制」が導入されたことから始まります。種川制は新潟県三面川で行われていた繁殖保護制度ですが (阿部 2021)、実施に当たっては種川の管理体制が重要です。それを担ったのが、明治維新後に無職となった旧藩士たちの授産のために、当時の山越内村遊楽部 (現八雲町) に入植してきた尾張徳川家でした。

徳川家は資金力及び組織的な運営体制をもっていたことから、当時の北海道開拓使函館支庁は、徳川家移住団の代表者である吉田知行に種川の説明をし、5 年間の試験期間における管理を委託しました。一方、種川制の導入により川のほとんどが禁漁とされたことで、旧来からの

住民はサケの捕獲が出来なくなり、不満が噴出することになりました。そのため、徳川家移住団はサケの捕獲を旧住民に委ね、その全捕獲数を折半するという形で調整を行ったそうです。なお、試験期間中の経費は徳川家で負担していたという記録があります。試験期間を終えた明治 18 年には、管理主体として徳川移民だけでなく旧住民も参画する「鮭魚種育組合」を設立し、種川としての運営は明治 33 年まで続きました (秋庭 1986)。

人工ふ化事業への切り替え

種川として運営を続けてきた遊楽部川ですが、明治 28 年以降はサケが激減したことから、より積極的な増殖方法である人工ふ化への移行が図られました。明治 34 年にふ化事業の実施母体となる「八雲鮭魚蕃殖組合」を創立、同年 9 月には

千歳ふ化場を範とする 500 万粒規模のふ化場を完成させました。この施設は用水の問題で失敗に終わりますが、明治 36 年に遊楽部川支流のセイヨウベツ川に好適な湧水が発見されたことから、同地へ施設を移転し、ふ化事業を継続しました。この場所には現在も、後述する水産資源研究所八雲さけます事業所が稼働しています。大正前期では全道的な傾向として捕獲数が低迷し、経営的に苦しくなった時期もありましたが、ふ化事業の実施に力を抜くことはなく、大正後期以降は親魚捕獲数も増加しました。

昭和期に入り、全道的に民営ふ化場の経営問題が深刻となったため、全道団体である北海道鮭鱒孵化事業協会は改善策を検討し、国営へ移管する方針を決めますが、遊楽部ふ化場は経営上の見通しも明るく、事業として成り立っていたことから、この方針には反対でした。しかし、ふ化事業の公共性や、全道的に計画的な運営が行われることの意義を鑑み、最終的には賛成することを決定しました(秋庭 1986)。こうして徳川家移住団が管理した種川制の開始から続いた遊楽部川での民営による増殖事業は、一旦幕を閉じることになりました。

資源増大

昭和 9 年から国営に移管された遊楽部川でのふ化事業ですが、昭和 50 年頃までは捕獲数の低迷が続いていました。しかし、昭和 46 年から昭和 58 年まで全国的な資源増大再生産計画が取り組まれたことで、遊楽部川でも放流数を徐々に増大させ、それに伴い捕獲数も年を重ねるごとに増えていきました(図 3)。同時にふ化施設の拡充や改修も図られ、国営の北海道さけ・ますふ化場八雲事業場(現・水産資源研究所八雲さけます事業所)が現在の姿に改修されたほか(図 4)、昭和 61 年には民営ふ化場である遊楽部ふ化場が建設されました(図 5)。以降はこの 2 つの施設が両輪となり、遊楽部川および周辺地域のサケ資源の維持安定に寄与してきました。

遊楽部川と回帰するサケの変化

遊楽部川は、ふ化場が比較的上流域(河口から約 17km)に位置することや、親魚捕獲施設以外に親魚溯上の障害となる河川工作物がないこと等の理由により、河口近くからふ化場までの

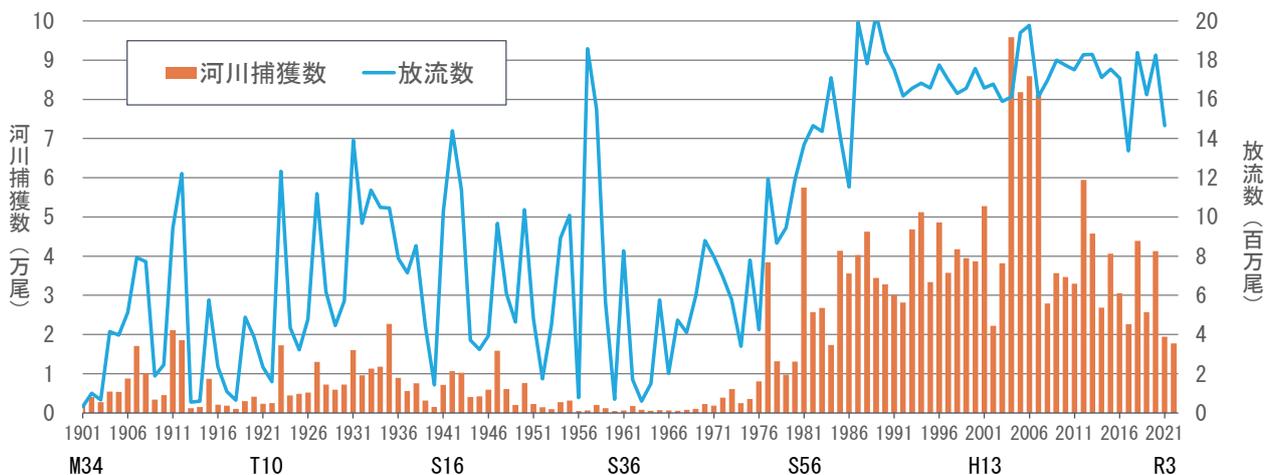


図 3. 遊楽部川のサケの捕獲数と放流数の推移
1901(明治 34)年~2022(令和 4)年



図 4. 現在の八雲さけます事業所



図 5. 渡島管内さけ・ます増殖事業協会遊楽部ふ化場

広い範囲でサケの自然産卵が見られていました（鈴木 1999）。しかし近年は、自然産卵が見られる場所も減少してきているようです。その一因として、支流での河床低下によって流出した土砂が本流に堆積し、産卵場が埋まった可能性も指摘されています（北海道渡島総合振興局函館建設管理部 2013）。

また、遊楽部川に回帰するサケは、昔から魚体が大きいことで知られていました。筆者が当時八雲町内にあったさけ・ます資源管理センター渡島支所に勤務していた平成 7 年～13 年頃も総じて魚体が大きく、時折 10 kg を超える個体も見られ、6 kg を超える大型サケを使った山漬は「遊楽部熊鮭」としてブランド化されたりもしました。しかし近年は、そのような大型のサケも少なくなっていました。

おわりに

遊楽部川における近年の親魚捕獲数は、2007（平成 19）年以降減少に転じていますが、それでも 2 万尾以上の捕獲数を維持してきました。しかし、令和 3 年と令和 4 年はいずれも 2 万尾を割っており、種卵の確保にも影響が出始めています。近年では自然環境の変化により降雨量や増水による災害等も増え、河床低下や自然産卵場所の減少など、遊楽部川とサケにとっては厳しい状況になっております。そのような時代でも水産資源研究所さけます部門では様々な調査・試験を地道に行い、サケ親魚の回帰数を高めるための努力を続けていく所存です。以前のような遊楽部川特有の大型魚が再び増えることを期待しながら（図 6）。



図 6. 令和 5 年に捕獲された最大魚体のサケ（雄：8.2kg）

引用文献

- 秋庭鉄之. 1986. 道南地方の鮭鱒ふ化事業史. 北海道さけ・ますふ化放流事業百年史編さん委員会, 札幌, 188p.
- 阿部邦夫. 2021. さけの溯上る川-1 三面川（新潟県）. SALMON 情報, 15:29-30.
- 渡島総合振興局 函館建設管理部. 2013. 砂蘭部川ニュースレター No.1 第 1 回砂蘭部川河床低下対策検討委員会. URL: https://www.oshima.pref.hokkaido.lg.jp/fs/8/8/6/4/8/8/3/_/saranbegawa-news01.pdf.（参照 2023-12-20）
- 鈴木俊哉. 1999. 遊楽部川におけるサケの自然産卵環境調査. さけ・ます資源管理センターニュース, 4:1-4.